



# 国立白門会 ニュース

第34号  
国立市北2-4-28  
能味寿哉 575-7110  
印刷(株)ツナサービス

## 小平支部の発足に乾杯

国立白門会会長 能味寿哉

さる三月十一日(土)小平市福祉

会館の四階ホールで小平支部の結成式と懇親会が開催され、私もご案内を頂いて喜んで出席いたしました。

既に平成十年三月から小平白門会として呱呱の声をあげておりますが、これには新支部長の竹内富男氏の並々ならぬ肝入りがあったもので、かねてご親交をいただいていた私にとっては一日も早い支部昇格の朗報をききたいと念じていただけに、本当

にご同慶にたえないところでした。

竹内支部長は、小平市でも早くから郷里の新潟県人会の誕生に力をいれたすなど大変義理人情のあついお人柄で、ほとんど独力で今日の支部結成にまで持ち込まれた情熱には心から頭が下がる思いです。当日は七十余名という大勢の会員が参加され、小平の前田雅尚市長さんもかけつけられ、母校名誉教授の八木国広先生が乾杯の音頭をとられるといった大変和やかなムードでうれしいうれしい限りで

した。

竹内さんが愛用のカメラを駆使されての取材ぶりは、つとに三多摩支部連絡協議会の各種行事でも役員方の驚嘆の的になっておりますが、当日も担当の若い役員に細かく指示をされたり、円滑な運営を期しての心配りには、ご出席の各支部長も感じ入っております。

当日は生憎母校主催の「法曹育成に関するシンポジウム」がホテル、ニューオータニで開かれていたため、大学の理事、学員会の幹部がやむなく欠席となり、代理出席の佐藤信昭事務局長から大変申し訳ないとおわびを述べる場もありましたが、地域支部としては一〇三番目ということ、今後のご活躍、ご発展をお祈りしたいと大きな声での

ご祝辞は快いものでした。

第二部の祝賀懇親会は、何人かの女性をまじえての明るい華やかなもので、料理もおいしい、樽を割ったの升酒も格別なものでした。三多摩地区連絡協議会の当番幹事である町田支部長の前田先生が酒興の赴くまま身振りよろしく踊り始めるといったハッピーングに一同大いに盛り上がり、小平支部の誕生をお祝いしたことです。私は最後に小平支部のますますのご隆盛を祈って万歳を三唱させていただきましたが、本当に心楽しい一日でした。

ただ残念だったのは、この日皆さんのお話にも出たように、高木友之助総長の突然の御他界(二月十日)ということでした。そして三月十九日(日)青山葬儀場で営まれたお別れ式に私も参列させていただきましたが大勢の学員、教職員を見守る高木総長の遺影には、先日お目にかかったばかりで、ジンと目頭を熱くいたしました。またご遺族を代表される三重野康元日銀総裁の切々として長い交遊を振りかえらるるお言葉には特に感銘を受けたことです。

高木総長の常々言われた「二十一世紀は中央大学を私学の日本一」という悲願を是非学員の一人ひとりが心底に受け止めて頑張ってほしいと

私も念じております。



## 中央大学 学術講演会

中央大学学術講演会運営委員会主催による講演会が平成十一年十一月十三日、国立公民館で開催されました。

我が支部は会場の設営、会員はもとより、広く市民に周知すべくチラシの印刷、配布等に全面的に協力いたしました。当日は学員、一般市民、約五十名が聴講し、盛況のうちには終了いたしました。

演題、講師及び終了後のアンケートは左記の通りです。

講師 中央大学文学部教授 鳥海 靖 先生

演題 外から見た日本、内から見た世界

歴史教科書の国際的比較・検討の会議から

アンケート集計結果

1 この講演会を何でお知りになりましたか

チラシを見て 十二名

市役所 三名

公民館 六名

その他 三名

知人の紹介 十四名

外の看板を見て 二名

その他 三名

2 講演内容は良かったか

良かった 二五名

普通 五名

☆岐阜県から前日 甲府市で開催された学術講演会に出席し、翌日当講演会にご来場された中大通信教育を受講中の高校の先生もいらっしやいました。遠路ありがとうございました。



# 現役引退について思うこと

大寺 順子



ごく限られた恩給のある官吏やお金持ちのご隠居の特権であった。最近になって、年金制度や公的住宅の充実により、ごく一般人でも引退生活を楽しめるようになった。そういう意味では引退できるということは、豊かさゆえの贅沢事ともいえる。

先だって、上岡龍太郎氏が五七才にして、芸能界引退宣言をした。その真偽については別にして、引退理由を老醜に近く皆様にそのような姿をお見せしたくない云々であった。五七才といえ、まだまだ現役、松方弘樹は五七才にして年若い女性と再婚するやもしれぬと取りざたされる年齢である。六七才の野村沙知代は写真集なるものまで出している。定年は六十才では若すぎる、六五才にしたらどうか、生涯現役・生涯青年等ともてはやされている昨今である。体力の限界等が影響されるスポーツ界なら分かるが、芸能界なら年相応のポストがないわけではない。五七才の引退には、まだ若いのにという思いもあったが、何故か、すがすがしく感じるのは私だけであろうか。

しかし一方では、「生きがい」とか「自己実現」とかを重視し、生涯現役でありたいともてはやされている。「熟女なんか」とかという番組では麗しの熟女が多々出演し、皆様大変美しく、六十才のデビ夫人に至っては大きく開けた胸元から色気が溢れんばかりで敬服する。が、どこかが違う。皆様のケバケバしい化粧。艶やかなドレス。同じ女性としてあこがれるが、又皆様の年齢を考えると尊敬に値するが、何かがちがっているように思えてならない。先日、宇野重吉がガンと戦いながら酸素吸入器を持参して地方巡業するさまを放映していた。控室では今にも倒れそうであるが舞台上にあがると張りのある声での名演技には、鬼気迫るものがあり、感動した。が、そのさまも何かが違うように思える。サラリーマンは、おおよそ六十才にして定年を迎え引退を余儀なくされる。辣腕でならした営業部長が

定年を境に見る影もなく老人風になってしまった等、よく聞く話である。そのために、趣味を持つとか、巷ではいわれられている。しかし、本当に趣味やボランティアに生きること生きがいとなるのであろうか。言い換えれば、現役の肩書きなしに「ただの人」で生きていけるだろうか。現役時代の男性の喜々たる名刺交換のさまは、よく目にするが、定年後に私はこういう趣味に生きています旨の名刺交換は見たことがない。肩書きを主に生きてきた男性にとっては、人生観自体を変える必要があるのではないか。その点、女性には「ただの人」になる訓練が出来ている。男性を紹介する場合は、どこどこ会社の課長さんとかであるが、女性は誰々ちゃんのお母さんとか、社長夫人の奥方であっても、平社員のお奥さんであっても、ただの主婦で、主婦に肩書きはない。

私も引退によって、敗北感がある。人生はこれまで、「自分の退は、見苦しく、避けなければならぬ。人生五十年から人生七〇八十年の時代となつて、「人生観」や「生き様」が問われることになったようだ。

## ブランコの揺らぎ

阿部正行



二〇〇〇年一月二七日で五十歳になりました。「五十歳とは自分にとってなんだろう？」と思う間もなく、いつの間にか白髪が増え頭部が薄くなり、顔にはしみが出て老醜がにじみでる歳になりました。昭和四三年に中央大学に入学し、学術連盟統計学会に部活動の籍をおきました。統計学を学ぶ意図で入部したのではなく、駿河台校舎の立看板に「調査をしよう」というのが目にはいり、私自信もともと調査に興味をもっていただけです。十月の白門祭で研究発表する題材で前年に佐世保

に入港アメリカの原子力空母「エンタプライズ」入港に対し、学生と機動隊の衝突にどのような反応があったか佐世保市民の意識調査に取り組みました。元氣一杯の年頃のこと、寝台車に乗り込み二〇時間かけて現地に行き一週間調査をしたわけです。調査は二〇歳以上の市民の中から、無作為で抽出し、部員十数人で手分けして一軒一軒早朝から夜の十時まで訪ねました。調査は相手が警戒します。大学の身分証明書を示し、あくまで学術的な意味合いのものであることを認識させることから始めなければなりません。この調査の中でとりわけ思い出されるのは、ある二十歳の女性を面談したときのことです。若いころの浅丘ルリ子に似た美人でした。半分は土間、二部屋、畳の貧しげな長屋の部屋で、彼女は何を聞いてもDN（わからない）と言う返事しか聞けません。話が途切れた間に、突然父親が自転車で帰ってきて、家の中でその娘の母親と夫婦げんかを始めました。ののしりあう喧嘩の声と夏の甲子園のテレビ中継の音声がまわりを騒がしくしました。気まづくなった私は、夏の炎天下家の前の公園でブランコに乗り喧嘩がおさまるのをまっことにしまし

た。やがて、喧嘩がおさまったので再度伺ったのですが、どの質問にも回答を得ることができずこの調査票は無駄になりました。当時の私は十八歳でした。(若かったですね)

ブランコにのっている風景と言えば、黒沢明監督が「生きる」の映画で志村喬演ずる公務員がゴンドラの歌(命短かし 恋せや乙女・・・)を口ずさみながら、「今までの自分は何をしてきたのだろう」と思うシーンが想い出されます。今までに仕事で何を残せたかを省みてその後、猛烈に住民の為に働いて死を迎えます。

さて、私自身これから先、何を目標にして過ごすかが課題ですが、毎日の生活に追われ流される中、ふと感じる時が五十歳の自分自身かもしれせん。

### はなし家稼業

三遊亭 竜楽

新入社員のシーズンがやってきました。我々の社会もこの時期になりますと入門志願の若者が寄席を訪れます。これがまた不況になるほど増えるんですね就職が決まらない連中が統々押しかけてくるんです。落語界はプロ野球のように優秀な人材を発掘してドラフトで指名権を争うなんてことはありません。すべて逆指名!しかも、指名された方はあまり喜ばない。たいてい

いの反応は「やめた方がいい」「やめなさい」「やめてくれ」ただ、不況だからといって採用をひかえるということはなく、真剣にお願いすればたいいていの師匠は採ってくれます。ですからすごい人が来ますよ。西武ライオンズの松坂投手は新人の時点で「教えることのないレベル」だったそうですが、我々の方に来るのは「教えようのないレベル」。師匠が地下鉄の東口か西口か迷って「あそこは何口か?」と聞いたら「出口です」: : : いろんな方がいます。そんな中から素晴らしい芸人が生まれたりするんですから最初の成績で切り捨ててはいけません。たいいていの失敗はお詫びすればゆるされますし、よほどのことがないとリストラもありません。定給もありませんがね。ある若手に「かせげないならやめたらどうだ」と言う、「退職金がありませんから」「ずうずうしい奴がいるもんです」。

入門してしばらくは見習いとして師匠について身のまわりの世話をします。よく掃除やカバン持ちをして芸がうまくなるのかという方がおりますが、なるんです。自分にとって一番大事な人のそばに居てその人がこちよく過ごせるように接することによって、人様に対する心遣いが身につく。それが後々たくさんのお客さまを前にして瞬時に最も良いセリフや間を選択する力を育ててくれるんですね。しばらく見習いを務めてから師匠から名前をいただいて前座になります。着物を着て高座に上がる事ができるわけです。芸名のつけ方は各師匠様ですが、出身地にちなんでいうものが多くですね。円楽の弟子で愛知県出身だから愛楽とか、京都から来たから京楽とか、北海道だから道楽とか(本当です)前座となると楽屋に入り、寄席の進行や師匠連の着がえ、お茶出し、高座がえしなどの雑用をこなします。様々な師匠連に應對することによって、幅広いサービスを学ぶわけですね。そして、高座で落後の実戦修行に励んで行きます。

この前座期間が三、四年でしょうか。これが終わると二ツ目です。今度は羽織を着て高座に上がれます。プロの噺家として認められたということですね。何より嬉しいのが雑用から開放されること。どんな先輩に聞いても二ツ目になった時が一番嬉しかったと言いますね。前座の間は年季奉公のようなもので、一年中休みなしで働きますが、二ツ目になれば自由に休めるんです。そのうち働きたくても休みがあることに気がつきます。このままじゃいけないと芸に正面から向き合う時期でもありません。二ツ目を十年近く務めると真打昇進。寄席でトリをとること

ができる身分になります。よく皆様は「真打ですか、すごいですね」とおっしゃいます。落語家の約七割が真打なんです。停年がありませんから。後はつまっているんですが、上の方が元気でして。落後は長いストーリーを暗記しないといけないので頭はしっかりしているし、扇子、手ぬぐいを扱う手先の運動はボケ防止になるそうですよ。楽屋は寝たきりならぬ座ぶとんに座ったきり〇〇の天下。中央にドンと陣取っていらっしやるので若手は居場所がありません。隅の方にひっそり隠れて居るといってどっちが隠居なんだという状態の毎日です。とにかく先輩方がたくさんおりますから下が入ってこないことには若手は上に行けないんです。ただ、近頃のように入門する者が多い時は定着率が悪くなる。真打の我々には影響ありませんが、前座さんがやめると共同作業ですから他の前座さんの雑用が増える。せっかく仕込んだのにやめられちゃかなわないと兄弟子の方が気を使って「大丈夫?肩こってない」とやめさせないための「肩たたき」に精をだしている有様です。そこで寄席の人手不足解消のためにいい方がいたら是非ともご紹介を。なにになに、前座の人手より客席の人手不足をなんとかしろ? そこなんですよ問題は!

### 御茶の水界限

田口正明

我が母校の中央大学は、神田駿河台にあった。最寄駅は中央線の御茶の水駅である。私は旧制法学部の最後の卒業生である。このため、予科と本科の六年間、通学で御茶の水駅を利用した。今とちがいが、当時の御茶の水駅周辺には、大きな建物はなかった。白雲たなびく駿河台の高層建築物といえ、二コライ堂である。だから、当時の二コライ堂は、駿河台のシンボリックな建物であった。御茶の水という名称は、この付近の崖の湧水を、徳川將軍のお茶用に献上したことに由来する。江戸城防備のため駿河台と湯島台を分離することになった。この分離工事により、神田川ができた。今では、御茶の水溪谷とも呼ばれ、都心のオアシスともなっている。御茶の水は駿河台と湯島付近の通称である。行政上の地名ではない。同じようなことは日比谷についてもいえる。地下鉄日比谷線や日比谷公園などで、日比谷はよく知られている。だが、日比谷もまた、通称である。行政上の地



名ではない。したがって、御茶の水と同様に、日比谷何丁目という言葉は、これまで聞いたことがない。御茶の水には、老舗の店が少なくない。なかには、江戸時代よりつづく店もある。鮓は、鮓とも寿司とも書く。握りずし、押しずし、散らしずしに大別できる。

笹巻毛抜鮓は、大阪流の押しずしである。今は握りずしが主流になっているが、江戸時代は押しずしが全盛であった。戦国時代は、酢をきかせた飯を、笹の葉に包んで兵糧にした。これにヒントをえて、笹巻毛抜鮓を考案した。シャリに酢をつよきかせ、つぎに魚の小骨を毛抜きで抜く。重しをかけて、数日間寝かせる。そうすると、酢が魚にしみこみ、甘くて美味しくなる。これを笹に包んで客にだしたところ、食通の評判になった。こうして、笹巻毛抜鮓は誕生した。この笹巻毛抜鮓は、商品名がそのまま屋号になった。このネーミングはキャノンやソニーのルーツといえる。

酢をよくきかせているので、持ち帰っても食べることができ。このため、グルメにも好評を博している。わたくしは、御茶の水へ行ったとき、この笹巻毛抜鮓を土産にして、帰ることにしている。笹巻毛抜鮓をいただく、自然に学生時代が偲ばれるのである。それは、青春時代の思い出のすしでもある。

平成11年度 国立白門会決算書

自 平成11年 4月 1日  
至 平成12年 3月31日

平成12年度国立白門会予算案

自 平成12年 4月 1日  
至 平成13年 3月31日

収入の部			支出の部		
科目	決算	予算	科目	決算	予算
年会費	195,000	300,000	会報費	52,500	50,000
総会費	92,000	120,000	総会費	171,575	150,000
寄付祝金	111,000	0	交際費	118,360	150,000
特別収入	197,075	30,000	親睦行事費	65,376	50,000
雑収入	187	0	通信費	54,015	70,000
前年度繰越金	450,831	450,831	会議費	8,287	30,000
			事務用品費	10,634	30,000
			雑費	14,473	50,000
			予備費	0	320,831
			次年度繰越金	550,873	
合計	1,046,093	900,831	合計	1,046,093	900,831

科目	摘要	金額
年会費	3000×100名	300,000
総会費	4000×30名	120,000
の特別収入	バザー等	30,000
部前年度繰越金		550,873
合計		1,000,873
印刷費	白門会ニュース他	160,000
支総会費		180,000
交際費	他支部総会他	150,000
出親睦行事費		70,000
通信費	会員連絡他	60,000
の会議費	役員会他	30,000
事務用品費		20,000
部雑費		20,000
予備費		310,873
合計		1,000,873

平成12年 5月10日  
会 計 高橋 雅幸 ㊟  
会計監事 穴戸 勇之 ㊟

平成11年度活動報告

厚生部

- \* 7月20日 納涼会 (石川酒造見学会)
- \* 10月10日 「くにたちウォーキング」参加
- \* 1月30日 新年会 (すえひろ亭)

事業部

- \* 4月4日 「さくらフェスティバル」参加
- \* 4月10日 中央大学多摩校舎観桜会
- \* 6月13日 定時総会 (プリンセスライラ)
- \* 11月3日 「くにたち市民まつり」参加
- \* 11月13日 中央大学学術講演会 (公民館)

組織部

- \* 会員の増員

広報部

- \* 国立白門会ニュース33号の発行

平成12年度活動計画

厚生部

- \* 日程未定 納涼会
- \* 10月9日 「くにたちウォーキング」参加
- \* 日程未定 ゴルフコンペ
- \* 日程未定 秋の一泊旅行
- \* 日程未定 新年会

事業部

- \* 4月2日 「さくらフェスティバル」参加
- \* 4月8日 中央大学多摩校舎観桜会
- \* 6月11日 定時総会 (プリンセスライラ)
- \* 11月5日 「くにたち市民まつり」参加

組織部

- \* 会員の増員
- \* 会員名簿の発行

広報部

- \* 国立白門会ニュース34号の発行